

現代エコツーリズムのあり方
——東海地方（浜松市・遠州地域）での実践を例に——

Present Ecotourism Trends and Models of Tokai Area in Japan's

藤森 憲臣、田ノ口 景子、田中 健二

1. はじめに

現代日本は、「平成」という年号を経てから30年、さらに新しい時代として「令和」元年を迎え、既に25年(四半世紀)以上の時が過ぎ、「観光立国」の概念設定を第1フェーズとし「昭和後期」に沸き上がり、「平成」はその概念に積極的に取り組む第2フェーズを担い、「令和」はこれまでの結果を醸成、発展する時代と言えよう。

もちろん「観光」は、経済の浮き沈みも激しく影響し、また世界レベルの社会情勢も大きく左右するコマンドである。ところが、日本の「昭和後期」の走り出しの勢いは残念ながら、今その影を忍ばせている。

平成26-30年、令和元年の現在にかけて都市近郊のビジネスホテルは連日満室状態で稼働しており、聞き取り結果では「中国及びタイ、次いでインド、韓国からのお客様が多い」とのコメントがあった。これら日本への旅行者に向けて「総合観光(ツーリズム：時及び場所、物・事+人)」を提供する各企業等での企画立案が水面下で動き出している実状がある。(〔1,4〕藤森ら、1994,2016)

2. エコツーリズムの定義 (〔1,4〕藤森ら、1994,2016)

【第1回・東アジア国立公園保護地域会議 (1993)】

"環境に配慮した旅行の推進または旅行者が生態系や地方文化に対する著しい悪影響を及ぼすことなく自然および文化地域を訪れ、理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう施設および環境教育を提供すること"

DEFINITION OF ECOTOURISM :

"The promotion of environmentally sensitive tourism and the provision of facilities and environmental education so that tourist will visit, understand and appreciate and enjoy natural and cultural areas without causing unacceptable Impacts or damage to their ecosystems or to local culture"

【NACS-J (日本自然保護協会)】

旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態

(1) 「エコツアー」と「エコツーリズム」2つの類義語 ([1,4] 藤森ら、1994,2016)

エコツアー及びエコツーリズムの「エコ」はエコロジー及び生態、環境、野生動植物、生態系等を広く指す。ただし、「ツーリズム」と呼ぶ場合「①ツアー形式」のみではなく、「②形式及びそれを支える周辺条件、ツアー効果、成果など」を含む全体像である。

ここで記述される「悪影響を及ぼさず、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむ」ため、「環境に配慮した施設、環境教育、地域の自然と文化の保護、旅行形態」を目指すためには、周辺の諸条件の整備と実行がなされなければならない。

対比し「エコツアー」の定義とは、参加者が「環境、自然（景観）、野生動植物、生態系を理解し、鑑賞し、関係する倫理観を向上させるべく、自然地域の中で環境、自然（景観）、野生動植物、生態系を損なうことなく、適人数の参加のツアー形式」である。

「エコツーリズム」とは、前述形態のエコツアーが繰り返行われることにより、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献する社会的しくみが作られることであり、これは単に旅行者の自覚や旅行者の工夫だけで達成されるものではない。

ツーリスト及び企画者、ガイド、受け入れ側等の協力が必要であり、その「ガイドライン及び提言」が以下のようなものである。[Table 1-5]

(2) エコツーリズムにおける各分野の役割 (Table 1)

| | |
|---|---|
| ① | エコツーリズム |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ 悪い事例：利己的思考 「気晴しを目的とした団体旅行、自然破壊・地域文化への悪影響、自然や文化に配慮を欠くガイド、自然を破壊する大規模な施設、自然や地域からの利益収奪」 ・ 良い事例：利他的思考 「自然文化を訪ねる少人数の旅、自然保護、地域文化への敬意、環境倫理を身につけたガイド、自然への悪影響をさけた施設、保護地域や住民への利益還元」 |
| ② | <p>旅行者の役割（エコツーリスト）</p> <p>エコツーリストとしての自覚、自然と地域文化への敬意、生態系の一員としてふるまう、地域の伝統、経済に悪影響を与えない</p> |
| ③ | <p>ガイドの役割（ツアーオペレーター）</p> <p>環境倫理を身につけたガイド、自然と地域文化の理解と解説、自然へのローインパクトの指導、地域文化との摩擦を防ぐ方法の指導</p> |
| ④ | <p>送り手の役割（旅行会社）</p> <p>エコツーリズムデザイナーとしての責任、自然と地域文化に配慮した旅行デザイン、旅行者、ガイド、地域コーディネーター、保護地域及び地域への利益還元</p> |

| | |
|---|--|
| ⑤ | 受け手の役割（自然公園、宿泊施設等） 自然と地域文化への誇りを持つ、自然の収容力、環境への影響に配慮した施設、旅行者及び住民に対する環境教育の提供、保護地域や住民に対する利益還元システム |
|---|--|

(2-1) エコツーリストのガイドライン (Table 2)

| | |
|---|---|
| ① | 訪れる土地の文化を尊重する |
| ② | 訪れる土地の自然環境に悪影響を与えない ・野生生物の生活を乱さない ・保護されている生物の採集をしない ・保護されている生物とその製品を買わない、持ち帰らない ・ゴミを投げ捨て、土や水などを汚さない |
| ③ | 訪問する地域を事前に学習するよう努める |
| ④ | 旅行の経験を通じて環境問題を考える |
| ⑤ | 自然とのふれあいを尊重し、自然とともに生きるライフスタイルを身につける |

(2-2) 旅行企画者及びツアーコンダクターのガイドライン (Table 3)

| | |
|---|---------------------------------------|
| ① | 「自然に親しむ旅行」から「自然保護につながる旅行」にしてゆく目的意識を持つ |
| ② | エコツーリズムの受け入れ体制が整った目的地を選ぶ |
| ③ | 企画段階で、地域に詳しい研究者や自然保護団体の意見を取り入れる |
| ④ | 団体旅行の場合は、募集人員20名以下を基本とする |
| ⑤ | 参加者に事前のオリエンテーションを実施する |
| ⑥ | エコツーリズムの主旨を理解した添乗員を養成する |
| ⑦ | その地域の自然と文化を熟知した地元のガイドを手配する |
| ⑧ | 地元経営の宿を選び、地元産のみやげを推奨する |
| ⑨ | 地元の人々とのコミュニケーションをはかる |
| ⑩ | 参加者や地元からのツアーの評価をフィールドバックする |

(2-3) 宿泊施設のガイドライン (Table 4)

| | |
|---|--|
| ① | 地域の自然、文化を表現するのにふさわしい立地条件を選ぶ |
| ② | 地域の自然、文化に悪影響を与えない規模とする |
| ③ | 地域の人々が中心になって、管理、運営、経営する |
| ④ | 施設、建物そのものが環境、エネルギーに配慮する |
| ⑤ | 宿泊者に過度な快適性を提供しない 次に宿泊施設の地域貢献について考えると、、、 |
| ⑥ | 地域の自然と文化を解説 または地域の自然文化に関するガイド、展示、施設、ガイドブックの紹介 |
| ⑦ | 地域の経済・文化のネットワークに入る |
| ⑧ | 地域の研究、保護、教育施設との情報交流を行う |
| ⑨ | 地域の産物を中心とした食事、販売物を提供する |

| | |
|-------------------------------------|--|
| ⑩ | 地域の環境教育に貢献する |
| (2-4) 保護地域（国・地方自治体）のガイドライン（Table 5） | |
| ① | 保護地域の収容力を科学的に設定し、自ら遵守すると共に関係者に守らせる |
| ② | 保護地域の最大入れ込み数を設定し、過剰利用にならないようコントロールする |
| ③ | 自然への接触が少なくインパクトが大きい利用を排除し、自然への接触が大きくてインパクトが小さい利用を促進する |
| ④ | 保護地域の管理に必要な資金を還元させるしくみをつくる ・入園料の徴収、施設使用料の徴収、特許料の徴収、土地使用料の徴収 |
| ⑤ | 環境教育施設の整備と活用を適切に行う |
| ⑥ | 保護地域の自然や環境教育に関する情報提供 |
| ⑦ | 調査研究に基づく、保護地域の生態系管理や環境教育プログラムの提供 |
| ⑧ | エコツアーの企画者やガイドの研修・学習の機会を提供する |
| ⑨ | 保護地域内で行われる民間の環境教育活動を援助する |
| ⑩ | エコツーリズムを保護地域の利用計画の中心に位置づける |
| ⑪ | エコツーリズムによる地域振興を推進する |
| ⑫ | エコツーリズムのモデル事業を実施 ・自然への影響、地域への経済効果をモニタリングしツーリズムにフィードバック |

3. 考察

エコツーリズム普及を図る上では「モデル事業実施」が非常に大切なステップになる。管理当局及び地元自治体、NGO、民間企業等が協力してエコツーリズムモデル地域を選定し、ここに示されたガイドラインに沿って事業を実施してきている。事業過程は詳しく記録し分析し、エコツーリズムの実現のためにフィードバックされる必要がある。社会実験は国内及び海外の両方で実施され、国内は保護地域利用の内容を転換するきっかけづくりに、また海外は国際協力の新モデルの価値を持つ。（[4] 藤森ら、2016）

4. 結論

「現代エコツーリズム」は提唱され始められてから、30年以上もの時間経過がある。しかし、未だに当時の枠組みの現状維持に止まってしまっている。日本では年号が「昭和」から「平成」さらには「令和」へ、世界では世紀が「20世紀から21世紀」とその間に変遷した。（[1,4] 藤森ら、1994,2016）

法整備として「エコツーリズム推進法（2007年）」が施行され、既に第1フェーズ、第2フェーズが過ぎた。次の段階、第3フェーズ（醸成期）に進んでいく必要があり、醸成期にはこれからの観光分野（産業及び学問としても）へも国際意識「(SDG's) Sustainable Development Goal's（国連：2015年）」を意識した行動をしていくことも求められる。

—東海地方（遠州地域（浜松市））での実践を例に—

5. はじめに

近年、健康増進のためウォーキング及びトレッキングのような自発的に身体を動かす趣味、趣向が個人レベルでも流行を見せている。また、観光産業でも全国各地の企業及び公共団体、個人だけでは無く関係役所まで「山歩き（中山間地活性化）」をコンテンツとした旅行企画を提案し、提供または販売を行っている。そこで「北遠（中山間地）」にも注目し企画提供する。

メジャー及びマイナー企画を比較すると、マイナーでは小規模であることで「時、場所、物・事、+人（自・他共）」の「+ α 」を直接的に実感出来る魅力がある。（[5] 藤森ら、2016）

本調査では、静岡県浜松市（遠州地域）をフィールドに実践しているエコツーリズム（主なプログラムは、地域食の実食体感、野生動物及び発光生物の観察）の開催について記述する。

6. エコツーリズム（パイロット版）の概要

2019年11-12月に静岡県浜松市を舞台に実施した「遠州地域エコツーリズム」を報告し、観光学の知見からその内容を紹介する。本ツアーは、2013年から毎年複数回開催し今回で7年目の継続実施となる。本企画は「日本極地（離島）の螢探検隊と遠州地域の螢探検隊」が合同開催し、ツアーガイドも隊員から選出した。主ガイドは日常的に全国各地で発光生物の調査研究を行い、大学講師及びエコツアー企画及び運営、人材育成に取り組む人材である。

中心企画は、海域に生息分布し日暮れから発光するヤコウチュウ及びウミホタル観察とした。他の一般旅行（主に昼間活動）と比較し異なる点は、主プログラムで夜間活動を余儀なくされる発光生物の実食及び観察、星空観測、夜景観賞が行われたことにある。

ツアースタッフ及び参加者、日程は次の通りである。

【ツアースタッフ（4名）及び各日程の参加者（学生）】

・N.F氏：日本極地（離島）の螢探検隊（代表事務）

浜松学院大学（自然環境論）及び 椋山女学園大学（環境の科学）の講師。社会貢献及び還元として、エコツーリズムを日常的に積極、実践的に展開している。また、遠州地域の螢探検隊で本ツアーの企画・立案及び運営、ツアーガイド。

・T.N氏：遠州地域の螢探検隊、(株)NISSIN

・Y.A氏：遠州地域の螢探検隊、(株)SUBARU

・Y.Y氏：遠州地域の螢探検隊、(株)NISSIN

・MY氏：遠州地域の螢探検隊、(株)JTECT

[参加者（総計：47名）]

2019年11月23,24日（土、日）名古屋より7名（＋スタッフ3名）

2019年12月07,08日（土、日）名古屋より11名、浜松より7名（＋スタッフ2名）

2019年12月14,15日（土、日）名古屋より9名、浜松より5名（＋スタッフ3名）

【ツアー日程】

2019年①11月23日（土）及び②12月07日（土）、③12月14日（土）

| | |
|----------------------|--------------------|
| 09:30 [名古屋] | 名古屋集合、出発 |
| 10:20 [浜松] | 浜松集合、出発 |
| 11:30 [天竜] | 洞窟探検：小堀谷（青谷）鍾乳洞 |
| 12:30 [春野] | 昼食：一休及びまるなる（蕎麦処） |
| 14:00 [春野・水窪] | 産業遺産：気田森林鉄道 |
| 16:00 [水窪・佐久間・春野・龍山] | 動物観察：野生動物観察 |
| 19:30 [浜名湖] | 夕食：万松（浜名湖の味） |
| 21:00 [浜名湖] | 発光生物体感・光る生き物 |
| 23:00 [三ヶ日] | 星空、天空観測・浜名湖全景の夜景観賞 |

.....

2019年①11月24日（日）及び②12月08日（日）、③12月15日（日）

| | |
|-------------|----------------------|
| 09:30 [浜松] | 宿泊施設出発 |
| 10:15 [浜北] | 農業体験（みかん狩り） |
| 11:30 [浜北] | 昼食：さわやか炭焼きハンバーグ |
| 14:00 [春野] | 呈茶会（実習）：栗崎園・煎茶の淹れ方講座 |
| 19:00 [浜松] | 浜松解散、出発 |
| 21:00 [名古屋] | 名古屋到着、解散 |

7. 遠州地域の関係各所施設等について

(1) 小堀谷鍾乳洞（洞窟探検と野生動物の観察）

秩父帯と称す2億5000万年前の地層に狭在する中生代三畳紀のレンズ状石灰石で形成され、更新世に出来た高位段丘面で軟らかい地層面に顔を出した石灰岩である。幅3m、高さ5mの岩の裂け目のような口を開けた形で、総延長62mの鍾乳洞。鍾乳石が発達したホール及び奥は登り斜面になり山の中腹に抜ける。構造はドリーネ底に開口した吸込み穴の形状。

(2) 気田森林鉄道跡（森林文化と産業遺産）

気田森林鉄道は、1933年着工。当初、発電所建設の資材運搬用として電力会社により設立され後に御稜林伐採の材木搬出目的で森林鉄道となり、最盛期には篠原貯木場

を起点として約33kmの距離を有し、1959年に廃止された。篠原貯木場に集めた材木はトラックにより搬出された。現在、路線跡は県道389号線として整備されている。

(3) 天竜スーパー林道（野生動物の観察）

東雲名を起点に、龍山町-春野町-佐久間町の境界を抜けて水窪町の水窪ダムまで続く延長全長約53kmのスーパー林道。林道は山を登って尾根沿いに秋葉山（886m）、竜頭山（1352m）、井戸口山（1335m）、門桁山（1384m）、麻布山（1685m）を巡る深い山中の森林地帯を走って、終点・水窪ダムまで続く。森林資源の開発利用と産業振興、地域開発を目的に1984年に総工費81億円で整備され、国内スーパー林道の中では19番目に完成した路線。

(4) 浜名湖（発光生物の観察）

砂州により境される淡水湖で、1498年の大地震及び高潮より砂州が決壊し外海と通じ、汽水湖となった。海水と淡水の栄養素が集まるため魚等の生物が豊富で、魚類・約400種、甲殻類・約60種、軟体動物・約100種と全国一の生物種が生息している。

湖の面積は日本で10番目の大きさである。形は複雑で、細江湖及び猪鼻湖、松見ヶ浦、庄内湖と4つの枝湾（水域）を持ち、これらの面積は湖全体の面積の4割に達する。

(5) 三ヶ日の森（星空観測と夜景観賞）

猪鼻湖（奥浜名湖スカイライン）北奥にある星空及び夜景の鑑賞スポットである。ここからは三ヶ日及び浜松市街、夜の静かな浜名湖の姿が見渡せる。

8. 観光対象及び行為

(1) 呈茶実習（煎茶の淹れ方）〔昼間〕

栗崎園（春野の茶）：栗崎貴史氏

全国茶品評会、世界緑茶コンテスト、国際銘茶品評会等で最高賞を受賞する緑茶（煎茶）及び抹茶、玄米茶、紅茶の生産及び加工（製茶）、販売まで独立して行っている老舗茶屋であり、代表者は次世代（若手）への実践（教育及び普及）に力を入れて労と時間を惜しまない人材。



Fig. 14 浜松市天竜区春野・栗崎園（春野の茶）呈茶実習

(2) 発光生物の実食及び観察〔夜間〕

今回、観察プログラムで主対象と

した「光る生き物（ヤコウチュウ、ウミホタル）」は全国の海域に広く、そして普通に分布する生物である。（〔6〕藤森ら、2017）

・ヤコウチュウ：*Noctiluca scintillans*

甲殻類で体が透明な2枚の殻に包まれている動物プランクトンである。刺激を受けると強く光る青い発光液を出す。光は、ウミホタルルシフェリンとウミホタルルシフェラーゼが反応したものである。

・ウミホタル：*Vargula hilgendorfi*

波刺激を受けて光るプランクトンである。渦鞭毛藻とは「鞭毛」という遊泳のための推進器官と触手を持ち、海中を浮遊する。また他の原生生物を捕食する単細胞生物である。時に、赤潮の原因になることもある。

<現地での観察>

本来ならば、現場となる観察地点を参加者には日没前に歩いて物理場の状況把握を行ってもらおう。しかし、本企画では遠方からスタートし移動に時間がかかる他のプログラムも体験する必要があるため割愛した。かわりに、現地を十分に知るガイドの案内に従う必要が生じる。

18時過ぎ、夕食会：万松（浜名湖の味）を開催し、食材としての発光生物（アオメエソ（通称：メヒカリ）、ヒイラギ、ダンゴイカ等）の実食体感を提供する。

20時半過ぎ、参加者に対し配布資料を用いた約30分の「光る生き物」に関する解説及び現場での注意喚起を行った。その後、車輛に分乗して観察地点へ移動する。

まず、海中（海底）に分布するウミホタルを探索する。ウミホタルは、余ほどに運が良ければ海中を発光して漂う状態で観察できるが、基本的には難しいためトラップを準備して捕獲することが観察への近道であることと、トラップによる捕獲作業も非日常的で楽しめる。

2,3名・1チームを作りトラップを用いて捕獲作業を実施する。浜名湖には生息数が少ないため捕獲できなくて気落ちさせてしまうことが多いが、これを次への伏線とする。

次に、ガイドによりヤコウチュウを先に発見及び観察地点を探索しておく。ヤコウチュウは、多くの場合は普通に分布しているので安心して観察してもらうことができる。目線が水面に1mの距離まで近づいて、ガイドの案内で2,3名・1チームずつの順番で観察する。すると、水面及び水中で発光する青白い光を観察できる。万が一、ウミホタルが捕獲できなかった際にも「光る生き物を観るプログラム」の感動は提供できる。

ヤコウチュウを観察すること約1時間、22時半には目視及び捕獲しての観察が終了した。最後に、鑑賞地点を移動し星空観測及び夜景観賞による「光（ひかり）」の提供で幕を閉じた。

<運営上注意すべき事項>

- 1, 現地に詳しいガイドまたは同コーディネータの準備
- 2, 旅行傷害（野外活動）保険への加入登録
- 3, 救急搬送先及び参加者の緊急連絡先（保護者等）を事前確認
- 4, 危険物、箇所及び危険生物の注意喚起

9. 結論

今回、「ツーリズム」の概念を重視し実践したエコツアーでは、夜間に光る生き物を観るプログラムを参加者に準備して提供し、参加者より好評を得た。

日頃、自然環境に直接親しむことの少ない若い世代でも本プログラム受入れ体験の結果、本企画が一般にも有効であることが証明された。また、短期的な旅程の中で参加者の満足度向上のためには、ガイドがプロフェッショナルである重要性が再確認された。

10. 参考及び引用文献

- 1) NACSJ (日本自然保護協会) : 資料集その4 エコツーリズムの定義. 公益財団法人日本自然保護協会.URL : www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism, 1994.
- 2) JES (日本エコツーリズム協会) : エコツーリズム. NPO法人日本エコツーリズム協会. URL : www.ecotourism.gr.jp, 2002.
- 3) 森田武志、高松一史、藤森憲臣, 観光のオーセンティシティについての理論的枠組みの考察, 名古屋産業大学 (環境情報ビジネス学会) 論集26号, 25 - 38, 2015
- 4) 藤森憲臣、田ノ口景子, 現代のエコツーリズムのあり方, 星城大学紀要16号, 47 - 52, 2016
- 5) 藤森憲臣、若杉和男、藤井直紀、内藤将志, 極地におけるエコツーリズムの実践, 星城大学紀要16号, 59 - 63, 2016
- 6) 藤森憲臣、大場裕一, 発光生物を主コンテンツとしたエコツーリズムのあり方, 名古屋産業大学 (環境情報ビジネス学会) 論集30号, 47 - 54, 2017

